第４６回　学校評議員会　会議録

令和３年７月１９日（月）　１４：００～１５：３０
弘前高等学校　応接室
出席者　評議員　４名･･･赤石茂、中根明夫、川村能人、須藤美恵子
　　学校側　校長、教頭（司会）、事務長、教務主任、生徒指導主任
　　進路指導主任、教務部員（記録）

１　学校評議員委嘱

２　自己紹介

３　校長挨拶

校長　：配布した資料の２ページを見てもらいたい。自分がなぜ弘前高校の校長になったのか、自分でいいのだろうかと疑問に思っていた。たまたま、和嶋教育長と出くわしたときに話す機会があった。その時に出てきた話が、「とがった弘高生」という話である。和嶋先生が他校に勤務しているときに、間接的に弘前高校の生徒のすごさを感じていた。現在の進学実績も知っているし、いい生徒を輩出しているのも分かっている。しかし、以前、うかうかしていると斬られるのではないかというくらいの鋭さを持っていた弘前高校の生徒は、現在どういった様子かということを話した。入試制度等に合わせて丸くなってしまっていないか、もしそうであれば、そうならないようにどんどん生徒の持っているものを伸ばして欲しい。そこで初めて、自分が弘前高校の校長に赴任した理由が分かった気がした。「とがった弘高生」の実例として、以前私が生徒に話したあとで、ある女子生徒が校長室を訪れ、「今日の話に興味を持ったのですが、何の本を読んだのですか」と聞きに来た生徒がいた。自分が生徒の時を思えば、そのようなことはなかった。このような生徒が、和嶋先生の言う、「とがった弘高生」の原石なのかなと感じた。こういった生徒をどんどん伸ばしていきたい。こういったことに基づいて、学校経営方針を作成した。今日はよろしくお願いします。

４　校内一巡（ねぷた制作参観）

学校側参加者と共にねぷた制作の様子を参観した。

５　意見交換　『令和３年度学校経営方針』について

校長　　：　従来のものをベースに作成したが、一部変更した箇所がある。なぜ、そのように変更したのかを御理解いただくために、３ページ目を御覧いただきたい。１つ目の新教育課程の編成にあたって、本校の教職員に考えてもらいたいことをまとめたものである。学習指導要領の改訂については国が１０年ごとに教育の方針を見直し、何が必要かを考え、大きな変更をしていくものである。人口減少等、地域社会が大きく変化していく中で、青森県は特にその影響が顕著に出る、そうなったときに学校で何を、どのように学ぶべきか、学校を核とした地域再生をどの様に行うのかを考えていかなければならない。先日も、人口減少に伴う学校の再編案が示された。地域とともに考えていかなければならないことである。

２つ目について、「２１世紀を生き抜く力」を身につけるためには、学校だけでは対応できない。そのため、「学校評議員会」の名を改め、「学校運営協議会」へと変更し、校長とともに学校経営についてあるべき方向性を考えてもらいたい。「弘前高校はこういうことをしていきたい。賛同できる方は手を挙げてください」というように、皆さんのネットワークも使いながら、呼びかけていってもらいたい。そのようなコミュニティースクールの制度が今後ますます導入されていく。

３つ目について、教育モデルが変化してきている。和嶋先生の言いうような多少尖っていても、自分の意見をはっきりといえる生徒を育てなければならない。

４つ目について、総合的な探究の時間を教育の中心に据え、教科横断型の知識を用いて、新しい課題を解決する力を養う。知識を習得するのではなく、学び方を身に付けていく学習となっていく。また、主権者教育、消費者教育、プログラミングを含む情報教育など、学校の教員だけでは対応できない部分も増えてくるので、地域の方々の力を借りて行っていくことになる。

時代の変化は、文部科学省が想定していたよりも速く、慌てて令和の日本型教育の構築を目指してという答申を出した。現在、８割が普通科となっているが、それぞれの地域の特色に応じたカリキュラムを作ることを求めている。そのために、スクールミッションの再定義をすることを我々に課している。学校は、３つのポリシーを明文化し、公表し、地域の生徒・保護者、専門家に示す必要がある。そして、教育課程を設定するにあたって、教育目標を社会と共有していかなけれ

ばならない。地域からの「なぜ必要か？」という問いに答えていかなければならない。

そういった中で、今年度の学校経営方針を定めた。大きな柱である目指す人間像、教育目標は変えられるものではない。私が責任を負える部分の重点目標以下を従来のものをベースにしつつ、文言を一部変更した。それを具体化したものが、具体的方策である。授業第一主義というのはこれまでもあったが、「何ができるようになるのか」を明確にするようにした。また、探究的な活動を中心に据え、自分で課題を設定し、自分で解決しようとする姿勢を養う。大学だけでなく、社会で生き抜いていけるような力を育てる。豊かな人間性の育成について、災害、事故、感染症があるという状況で、自分を犠牲にしてというのでは、自分も周りも守ることはできない。最低限、自分は自分で守る、かつ、力があるので周囲を守ることもできるようになる。

５番の行動指針がこれまでになかったもので、先生方にお願いしていることである。教員は１つの教科だけを教えているが、生徒はいくつもの教科を学んでいかなければならない。その中で、教員は生徒の少し前を行く者であり、同じ道を歩み、自分を越えていく生徒を喜びとして感じることができるようになって欲しいということをお願いしている。

教頭　：　５ページを御覧いただきたい。昨年度の評議委員会を経て作成したものである。確かな学力の育成について、関係者評価、保護者アンケート等で概ね良い評価を得たこともあり、自己評価をＡとした。今年度への課題としては、ICT 機器を活用した授業を研究していくことである。豊かな人間性と社会性の育成については評価をＢとした。感染症の影響で制約の多い状況だったが、行事等を代替して行うことで育むことができたと考える。今年度は、ねぷたの運行はできないが、制作は行い、校内で代替行事を行うこととしている。キャリア教育の推進については自己評価をＢとした。生徒が自己の在り方生き方を主体的に考えた進路選択ができるように指導してほしい、特別活動や総合的な探究の時間を一層充実させて欲しいというような意見をいただいた。各教科の核と位置付けて活動していきたい。重点校としての任務の遂行に対しては自己評価をＡとした。昨年度は制約が多かったがオンライン等を活用して行うことができた。今年度は、地域全体の学力の向上、教員の資質・教育力の向上を目指したい。今年度も制約が多いが、様々なものを活用し取り組んでいきたい。

教務部　田澤　　：　６ページから１０ページまでが各分掌・学年の目標である。その中で教務部として取り組んでいることを説明する。本校では生徒一人ひとりへのタブレットの配布、wifi 環境の整備を進めている。今後 ICT 機器を活用した教育が求められるので、研修・環境整備を進めていきたい。また、各教室にエアコンが設置されるということで、生徒の学習環境の整備がさらに進んでいくと思われる。３つ目の授業改善のための研究活動を進めることについて、５月に予定していた保護者対象の授業公開はコロナ禍の中で中止せざるを得なかったが、１１月にも予定しているので、どうにか実施したい。教育実習も実施が危ぶまれていたが、７名の実習生を受け入れどうにか実施することができた。弘前大学の教職大学院の受け入れについても、５月からの予定であったが、６月の末から開始することができた。観察実習についても１０月に実施する予定である。総合的な探究の時間を教育活動の重点と捉え、２学年で課題研究に取り組み、１１月に保護者に向けて発表をする機会を設ける予定である。新教育課程について、何度も教員間で議論を重ね、校長に答申し、了承を得ることができ、今後教育委員会の指導を受けながら設定していきたい。２学年の類型選択について、現在担任と生徒とが面談を重ねて進めている。１１月に最終決定する予定である。校務支援システムの導入について、我々教員も理解を深めていく必要があるため、今後研修等を行う予定である。

生徒指導部　成田：　１３・１４ページにあるような行事を通して、生徒指導部の目標を達成していきたい。今年度もこれまで感染症の制約があり、中止や規模の縮小をしなければいけないものも多かった。避難訓練、校内総体の実施を延期している。現在、ねぷた制作を行っている。弘高祭についても慎重に検討を重ね、運行は中止としたが、それ以外はできるだけ、自治会の計画した通り実施できるように取り組んでいる。その中で、感染症の対策については密を避け、送風機を使って換気をするなどして取り組んでいる。これからも感染状況を見ながら進めていく予定である。校医とも相談したが、来年までかかるのではないかということだったので、今年度の評価をして来年度に生かしたい。１５ページの部活動の加入状況については例年と大きく変わったところはない。１６・１７ページは部活動の主な入賞歴である。

進路指導部　髙杉：　重点目標の１つ目について、先生方には授業の質の向上に取り組んでもらえるように声掛けを行っている。進路講話をオンラインで実施

したが、生徒からも多くの質問が出て盛り上がった。医学ゼミナールについてもオンラインで実施した。生徒からの多くの質問に答えていただいた。コロナウイルスワクチンについて興味深い話をしていただいた。力を入れて取り組んでいるのが、校内模試の作題力向上を図ることである。校外模試ではなく、校内模試を使って大学の合否判定を出している。そういった意味でも、校内模試は弘前高校のプライドに係る部分である。そのために、入試問題の研究、授業のポイント等の見直しが必要となってくる。２つ目について、教務部からもあったが、ICT を活用した授業を行っていかなければならないと考える。しかし、機械に使われるのではなく、適切に機械を使うことができるように指導していかなければならないと感じている。各業者がオンラインで研修を実施していることで、隙間時間に受講できるようになった。教員にも進んで受講するように声掛けを行っている。３つ目については、これまで進路主管だったものが、他分掌主管へと移ったものもあるので、他分掌と協力して取り組みたい。また、総合的な探究の時間、キャリア教育について、進路指導部としてどのように協力できるかを考えていきたい。進路指導部として進学力を高める支援事業を２つ抱え、企画・運営中である。重点校として近隣校と声を掛け合い、地域でレベルアップを図りたい。学問の本質を追求するような揺るがない授業第一主義を徹底するよう、先生方に声掛けを行っていきたい。１９ページ以降は資料である。京都大学の４名受験は例年に比べて多く、チャレンジする生徒が多かった。東北大学の合格者３０名以上は２年連続である。過年度生も頑張って良い成績を収めている。進路未定者がかなり少なく、進学率が高くなっているが、入れる大学に入ったことで上がったわけではなく、挑戦してのものなのでうれしく思う。２０ページから２６ページは後程御覧いただきたい。

教頭　：　評議員の方々から、お一方ずつ御意見を頂きたい。

評議員　赤石　：　校長先生の最初のあいさつから、先生方の心構え、生徒への接し方を感じて心強く感じた。また、校長先生からは弘前高校を引っ張って行ってくれそうな雰囲気を感じた。市内を見て歩くと、予備校に通う弘前高校の生徒が多いような印象を受ける。勉強しようという気持ちが強いのかと思う。

評議員　中根　：　コミュニティースクールの導入について、運営から経営へというこ

とであったが、大学でも実施しているが、現実的には運営でとどまっている印象を受ける。

校長　：　弘前市の小・中学校はコミュニティースクールの導入が圧倒的に進んでいる。弘前市教育委員会、弘前大学はノウハウがあるので、教えてもらいたい。

評議員　中根　：　運営から経営へ移行し、人事から何から全てやろうというのは大きな改革になるのではないかと思う。

評議員　川村　：　昔、私も「とがった弘高生」であったと思う。いい言い方をすればじょっぱり、今の生徒にもタフであって欲しいと思う。ねぷた制作が行われているのは非常にうれしい。活動を見ると３～４０年前を思い出す。生徒たちが生き生きしている。そして、校長先生が言うように、とんがっていて欲しい。

評議員　須藤　：　コロナ禍の中、様々な規制の中、できるものをやってきていて良かった。また受験体制も変わった中で、お疲れ様です。BS の番組で『The 名門校』という番組があるが、有名な進学校ほど人間力の育成に力を入れているように感じる。その中で育った生徒が自己実現する力を身に付けているようである。勉強しなさいと言わなくても、周囲が勉強するのを見て勉強するような雰囲気がある。生徒が自分たちで作り上げていく校風というのもいいなと思う。弘前高校もいつかその取材を受ける日が来ればいいなと楽しみにしている。

教頭　：　以上をもって第４６回の評議員会を終了します。